

学習ノート「青谿書院記」 4

令和6年1月13日（担当 哲彦 北見）

原文

而託迹於此、以占其形勝者、實自吾始。苟吾之不愧古人、則流風餘韻、亦自歷久不絕、而青谿之勝、必當與夫先世高踏之逸蹤、千古相輝映、以倍其眞致矣。不然、則境不負其人、而人負其境、乃我之有今日、亦足以爲山靈之汚辱矣。夫奉身入山者、固無意於當世矣。然而不能無意於百世之後者、亦有志者之或所不廢也歟。

安政丁巳季夏、緝自記

（『池田草庵全集』より）

読み

迹を此に託して以て其の形勝を占むる者は、実に吾れより始む。苟くも吾れの古人に愧じざれば、則ち流風餘韻も亦自ら久しきを歴て絶えず。而して青谿の勝は必ず当に夫の先世高踏の逸蹤と千古相輝映し、以て、其の眞の致を倍すべし。然らざれば則ち、境其の人に負かずして、人其の境に負く。乃ち我れの今日有るも、亦以て山靈の汚辱と為すに足らん。夫の身を奉じて山に入る者は固より当世に意無し。然れども百世の後に意無きこと能はざるは、亦志有る者の或ひは廃せざる所なるか。

安政丁巳季夏

緝自ら記す

現代語訳

そういうすばらしい景勝をここ青谿にあてはめて、そこを占めるのは私から始まのだ。ほんとうに私が昔の人に恥じないような生活であれば、周りの自然のすばらしさも長年経てもなくなるようなことはないだろう。それで、青谿の景色は、昔のあのすばらしい景色と輝きあって、その輝きでそのすばらしさを何倍にもするだろう。そうでなければ、周りの景色は人に背いたりしないが、人の方が周りの景色に背くことになる。つまり、私の今こうしていることも、山靈を汚してしまうことになる。この身のすべてをもつてこの山に入る者は、もとより今の世間に未練はない。しかし、未来に思い残すことは、志のある者のやめにすることができないことであろうか。

安政四年丁巳夏

緝自ら記す

頭注

吉村秋陽曰、鋪拝容與、格調自然高、後半入_ニ議論、辭婉而理直、無限感慨、無限期許、

読み

吉村秋陽曰 鋪拝は容與にして、

格調は自然にして高く、

後半の議論に入りて辭は婉、理は直、

無限の感慨、無限の期許

言葉

迹_ニアト 昔の人が行つた物事のあと

託_ニタクして まかせる 形勝_ニ景勝

苟_ニイヤシクモ もしも、かりに、ほんとうに、

愧_ハはじる 高踏_ニコウトウ 世俗を超越する

逸蹤_ニ 蹤_ニシヨウ あと

千古_ニセンコ 遠い昔 永遠 輝映_ニ輝いて照らす

歟_、〔助辭〕か。文末につけて疑問・反問の語氣をあらわす助辭

鋪拝容與

鋪_ニフ しく

容與_ニヨウヨ ①ゆとりがあつて、静かなさま。

辭婉

辭_ニ辞 ことば 婉_ニエン おだやか

高澹

澹_ニトウ 静か ゆつたりと